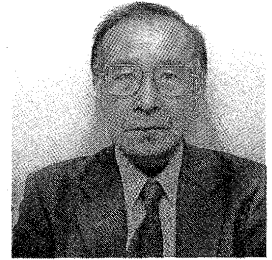


4年生よ、卒業研究に没頭しよう

松永 勝也

(九州産業大学・情報科学部教授)



この度、情報科学部の情報科学総合コースが「情報及び情報関連分野」のJABEE 技術者教育プログラムとしては、中国・四国・九州の私立大学では初めて認定されるという誇らしいものとなった。これは、平成14年に情報科学部の創設と同時にJABEE（日本技術者教育認定機構）認定に向けて準備をしてこられた牛島学部長はじめ情報科学部の開設時からの先生方の努力によるものであり、また、情報科学部第2期生として入学し、そのプログラムに沿って勉学を進め卒業して行った「情報科学総合コース」の学生諸君の努力によるものと言えよう。

JABEE 認定を受けた「情報科学総合コース」の修了者は、技術士（情報工学部門）第1次試験の合格者と同等とみなされる。JABEE 認定者は、技術士の元で技術士補として4年の実務経験を積むと技術士第2次試験の受験資格ができ、技術士への最短コースを経ることができるようであり、大学院修士課程修了者以上の大きな特典が与えられているようである。この大きな特典のある情報科学総合コースに多くの在学生諸君が挑むことを期待する。

ところで、今年の3月には、2回目の卒業生たちが社会に旅だてて行った。社会で彼らに期待されるのは、多分、模倣しようとしても模倣するものがないソフトウェア作りであったり、ハードウェア作りであったり、あるいは常に改善を求められる業務の遂行であろう。これらの達成においては、参考にできる資料を集め、解析し、それを元に設計したり、業務計画を立てたりと言うことになると思われる。参考にすることがない場合は、どのように進めればよいか分からないといった心理状態になるかもしれない。このような未知の領域の業務に積極的に取り組めるかどうかは、それまでの問題解決経験が大きく影響すると考えられる。

卒業研究は、将来、社会で遭遇するであろう未知の問題の解明を体験する機会であるともいえる。卒業研究を行うに当たって、まず、初めに行うべきは、社会において解明すべき問題（課題）、あるいは、それが存在すれば社会に有用であろうと思われる人工物などの発掘（問題発見）である（現実には、卒業研究では、課題は指導教員が与えることがほとんどと思われる）。次に、その問題の解法や人工物の開発法が未知の場合、まず、入手可能な資料でそれらを検討し、解法・開発法の見当をつけることになる。次に、それが真であるかどうかを、実験によって試すことになる。ただし、初めに浮かんだ解法では、問題は解決できない場合がほとんどであるといえる。次に、その失敗の原因を分析し、それ迄の方法を改善し、再度、実験を行い、それが真であるかどうかを確かめることになる。このような試行錯誤の繰り返しによって、問題解決や開発を行うことになる。この繰り返しが、数回でよいのか、数10回になるのかはやってみなければわからない。場合によっては、それまでとは全く異なった視点での解明をせざるを得ない場合もある。そうなると、さらにまた、多くの時間を要することとなる。しかし、どうであれ、ある程度の不確定要素があっても、見当をつけて実行しないことには問題の解法は見いだせないと言える。卒業研究で、このような過程を経て問題を解明できた経験があれば、積極的に未知の問題の解明に身を投じることが出来ると思われる。ある程度の犠牲を払ってでも、卒業研究には多くの時間を費やす価値のあるものである。4年生諸君、卒業研究に没頭しようではないか。